

アビダルマ範疇論の基礎をなす仏教的な人間理解

—— 存在分析における五蘊の位置づけをめぐる ——

横山 剛

京都大学大学院博士課程

輪廻の苦しみから脱するために、仏教では、断すべき要素と修すべき要素を選別することが求められる。そして、そのために、物質的な領域と精神的な領域の両面にわたって世界を観察し、存在を構成する要素を分析することが重視される。存在の分析に関する教理の一つに、人間の存在を環境を含めて五種類の要素の集合として捉える「五蘊」という概念がある。五蘊は仏教における基礎的な教理の一つであり、五蘊を扱う研究は少なくない。しかし、その大半が五蘊の始原的な形態や機能を検討するものであり、研究の対象が初期經典の五蘊に偏る傾向が見られる。一方、アビダルマの存在分析については、説一切有部において新たに成立した教理である「五位」が研究の中心となる。このような状況を見ると、初期經典から有部のアビダルマへと至る中で、存在の分析を担う教理が五蘊から五位へと移行したかのような印象を受ける。しかし、実際はそうではなく、アビダルマの存在分析においても五蘊は主要な位置を占める。仏教における人間の定義を多角的に検討することを目的とする本大会において、発表者は、アビダルマの存在分析における五蘊という点から、仏教における人間理解について考察を行いたい。

まず、発表の前半では、有部論書に説かれる存在の分析とそれを素地とする大乘論書における存在の分析を概観することで、有部の後期以降の論書では存在の分析が基本的には五蘊、十二処、十八界を組み合わせた体系の下で説かれ、その中でも五蘊が先頭に置かれ、主要な位置を占めることを指摘したい。続いて、『俱舍論』の第一章で解説される存在の分析において五位が説かれないことについての FRAUWALLNER [1963] と櫻部 [1969] の見解を検討する。両研究は、蘊処界を基礎に据える存在分析の伝統や經典由来の教理である蘊処界の權威のために、世親が第一章において五位を説くことができなかったと指摘する。両研究が指摘する存在分析における伝統や權威については、確かにその通りである。しかし、さらに踏み込むならば、五蘊を始めとする体系がアビダルマの存在分析に至っても意義を失っていなかったためにそのような伝統や權威が存続したのであり、世親は当然のこととしてそれに従ったとも考えることができる。この点を考察するために、発表の後半では、主に『俱舍論』の解説に基づいて、アビダルマの存在分析における五蘊の意義について検討したい。以上の検討に際しては、(1) 有漏無漏と五蘊の関係、(2) 存在分析の主体としての五蘊、(3) 認識対象としての五蘊という三点から考察を行い、アビダルマの存在分析における五蘊の意義を明らかにする。

以上の考察を通じて、本発表では、有部のアビダルマの至っても、存在の分析において五蘊が主要な位置を占めることを指摘し、さらに、アビダルマの存在分析において五蘊が仏教の基礎をなす人間理解と密接な関わりを有していることを明らかにしたい。

参考文献 FRAUWALLNER, Erich. "Pañcaskandhakam und Pañcavastukam," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*, Band VII, 1963, pp. 20–36. 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』, 法藏館, 京都, 1969.

キーワード アビダルマ、五蘊、俱舍論